

令和6年度 日本大学スポーツ科学部 個人研究費 研究実績報告書

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科
資格： 准教授
氏名： 秋葉 倫史

研究課題名	動名詞の動詞的特徴における通時的変化
研究目的及び 研究概要	本研究は、英語の動名詞の動詞的特徴の変遷を通時的に分析し、その頻度の推移や内部構造の変化を量的・質的に明らかにすることを目的とする。従来の研究では、Koma (1980)、Tajima (1985)、Ross (2004) などにより動名詞の性質が論じられてきたが、大規模な通時コーパスを用いた分析には、なお検討の余地があると考えられる。 本年度は、動名詞研究の前段階として、形態的に混同がみられる現在分詞の用法とその通時的変化を重点的に分析した。その過程で進行形の通時的変化にも注目し、特に形態的变化に焦点を当てて考察を行った。 【参考文献】 Koma, Osamu (1980) "Diachronic Syntax of the Gerund in English and the X-bar Theory," Studies in English literature, English Number 1980, 59-76. Ross, John Robert (2004) "Nouniness," in Aarts, B. et al., eds., Fuzzy Grammar, Oxford University Press, Oxford, 351-422. Tajima, Matsuji (1985) The Syntactic Development of the Gerund in Middle English, Nan'un-do, Tokyo.
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	本年度は、動名詞研究に関連し、現在分詞の発達、さらに進行形の形成過程に焦点を当てた研究を行った。特に、「be＋現在分詞」構文における現在分詞の語尾変化に着目し、古英語から初期近代英語にかけての通時的変遷を分析した。 進行形の発達を考える上で、現在分詞の語尾が「-ende」から「-ing」へと変化した過程は重要な論点の一つである。古英語の時点で「be＋現在分詞（-ende）」の構文は確認されるが、当時の用法は現代英語の進行形とは異なっていた。その後、中英語になると「be＋現在分詞（-ing）」の形式が現れ始める。この「-ing」形はもともと動名詞の語尾として使われていたが、次第に現在分詞としても分析されるようになり、進行形の発達に関与したと考えられる。 本研究では、通時的コーパス（YCOE・PPCME2・PPCEME）を用いて、「be＋現在分詞」に現れる語尾の変遷を記述し、語尾交換が中英語後期に生じたことを示した。また、抜粋した例文のコーパス情報（ラテン語の影響や方言差など）にも言及し、語尾変化の過程を検証した。 研究成果として、本研究の結果を日本大学英文学会10月シンポジウムにて発表した。今後は、今回得た例文の質的な検証を進め、進行形の意味的变化についても詳しく分析する予定である。